

「五年の歳月が生んだもの」

島根県 正禅寺住職 吉長裕教
しょうぜんじ よしながゆうきやう

坐禅会をきつかけに、お寺によくお参りに来てくれるようになった中学三年の女子生徒の「悩みと成長の道のり」です。

「私は、低い鼻がコンプレックスなんです。横から見ると余計に目立って、嫌で仕方がありません」女子生徒は、5年ほど前の小学四年生の頃から低い鼻が気になり始め、毎日マスクを着けるようになりました。「鼻が隠れると、すごく気持ちが楽になって過ごせるようになったんですけど・・・」

「ずっとつけていると、『何でマスクつけてるの?』と友達に聞かれることが増え、私は本当のことが言えずごまかして笑うだけでした」

「五年生の終わり頃、コロナ禍になって全員マスク着用になると、それまで一人浮いていた私が教室の中に溶け込んだような気がして、ホッとしたのをよく覚えています」

「思っていたよりも長いマスク生活になって良かったんですけど、中三になって少しすると『マスクをはずしてもいい』と先生に言われ、私が絶望する中で、素颜になる子が増えていきました」「ある日、友達に、『ねえ、マスクはずさないの?』と聞かれた時、何故か私は本当の気持ちを話してしまいました。すると友達は『えっ、そうだったの!可愛い顔なのに、何で隠しているのか不思議だったんだよ。私なんて、この広いおでこが最悪なんだけど、マスクじゃ隠せないから随分前に諦めたわ!』と笑いながら言い、近くにいた友達数人を呼んだと思ったら、突然『自分のコンプレックス暴露大会するよ!』ってなったんです」

「ここまで話が進むと、女子生徒の表情も口調も最初と違い、とても柔らかくなっていきます。続きを聞くと、それぞれ口に出しにくかったことを話す中で、全員がそれぞれに悩んだ経験を持っていたことを知り、辛かった気持ちも「みんな同じじゃん!」と思えて、皆の中に溶け込めた一瞬になったそうです。

一人で思い悩むと弱さが先に立つことも多いのですが、皆と共有する勇気を自然な形で引き出してくれた友達も、また、きつと苦しんだ時期があったことでしよう。「まだマスクをはずすのに抵抗はあるけど、低い鼻も個性だと思って、マスク無しで出掛けるようになりたいです」と言う女子生徒の顔には強い意志が表れていました。

大本山永平寺を開かれた道元禅師は「海は、全ての水を拒まずに受け入れるので大きな海になります」とお示しです。さらに「大きな海になるのは、水も海を拒まない徳を持っているからです」と続きます。

人と人との関りは複雑です。しかしその中であって、自分の個性を大切にしながら、他人の個性をも尊重して受け入れることにより、お互いの良い関係が生まれます。周りの人が暗い顔をしていたら、自分も穏やかに生きることができません。悲しみ、苦しみを共に分かち合い、仲良く和合することが、共に生きるために大切なことだと思うのです。